

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

ゾウの「はな子」

井の頭自然文化園の人気者
アジアゾウの「はな子」が
まもなく69歳の誕生日を迎えます。
多くの人たちに愛されてきた
はな子の歴史をたどります。



現在のはな子（平成27年11月4日撮影）。遊び道具の丸太を鼻でもってあそんでく満悦の様子。

戦後初めて来日したゾウとして
たちまち動物園の人気者に

武蔵野市御殿山の「井の頭自然文化園」に、国内最高齢のゾウがいるのをご存知でしょうか？

メスのアジアゾウ「はな子」は、現在68歳。野生のアジアゾウの寿命は約60年と言われており、人間の飼育下でこれほど長く生きるのは、極めて異例だということです。

取材に訪れたのは11月初旬。暖かい陽射しが降り注ぐゾウ舎の周りには、親子連れや、遠足で来園した子どもたちの姿でにぎわっていました。陽だまりの中でゆっくりと動き回るはな子の姿……その体はシワで覆われ、高齢のしるしである白い斑点が目立ちます。

訪れた人たちからは「長生きゾウさんなので、これからもずっと元気でいてほしい」「私も幼いころ、両親に連れて来てもらいました。今日は娘と一緒にはな子に会いに来ました」といった声が聞かれました。

井の頭自然文化園の記録によると、はな子は昭和22（1947）年生まれ。第二次世界大戦末期の猛獣処分（空襲で檻が破壊された際、猛獣が逃亡して人間に危害を及ぼすのを

未然に防止するため、多くの動物が殺処分された）や栄養不良により多くのゾウを失った日本国民のために、タイ王国から両国友好の象徴として贈られました。タイでの名前は「カチャー」でした。

昭和24年8月22日、デンマーク船「オラフ・マークス号」でタイを出発したカチャーは、9月2日に神戸港に到着。特別貨車とトラックを乗り継いで9月4日に上野動物園にやってきました。上野動物園では「カチャー」と呼ばれていましたが、公募の結果、猛獣処分で悲しい最期を遂げた3頭のゾウのうちの1頭「花子（タイ名・ワンディー）」の名を継いで「はな子」と名付けられました。

その3週間後には、インドから贈られた「インディラ」も到着。上野動物園では、年末までの3カ月間で100万人近くの入園者が訪れるゾウブームが起きました。

市民の熱望を受けて武蔵野へ 飼育員の愛情が、はな子を救う

翌昭和25年から、はな子とインディラは移動動物園で日本各地を訪れました。インディラは列車などで東日本を広く巡回しましたが、まだ3歳だったはな子は、都内を中心に



（左）歯が1本しかないはな子のために、餌は細かく刻んだり、柔らかい状態にして与える。好きな食べ物はイチゴ、バナナ、梨、柿、スイカなど季節の果物。（右）今年（平成27年）2月1日にも「はな子68歳のお祝い会」が行われ、好物のイチゴがたっぷり乗ったバースデーケーキが贈られた。

東京近郊を回りました。このとき井の頭自然文化園ではな子を見た武蔵野市民などから、「井の頭自然文化園にはな子を迎え入れたい」と求める声が上がります。その強い要望に応え、昭和29年3月5日、はな子は上野動物園から井の頭自然文化園に移ってきました。



(右)トラックに乗せられ、上野動物園へ向かう。トラックに飾られた横断幕には「力チャ子ちゃん 歓迎」「象さんようこそ」の文字が見える。



(左)昭和24年9月4日、上野動物園に到着したはな子。背景に写る人だかりが、当時の人気が高さを物語る。

ところが、2年後の昭和31年、悲しい出来事が起こります。深夜にゾウ舎に侵入した酔客を死亡させてしまったのです。さらに4年後の昭和35年にも、ゾウ舎で飼育員が死亡する事故が起きました。このため、はな子は前脚を鎖でつながれ、ゾウ舎内に閉じ込められてしまいます。環境の変化によるストレスなどから餌をほとんど口にしなくなり、はな子は次第にやせ細っていきました。

その後しばらくして、はな子に転機が訪れます。ひとりの飼育員が、はな子の担当になりました。多摩動物公園で子ゾウを担当していた山川清蔵さんです。山川さんは、はな子の鎖を、着任して4日目に解きました。そこには「閉ざされた心をもう一度開いてあげたい」という気持ちがあったのでしよう。山川さんの愛情あふれる飼育が実を結び、はな子は次第に心を開き、元気を取り戻していききました。山川さんは退職までの約30年間にわたってはな子に愛情を注ぎ、その献身的な飼育の様子は、書籍やテレビドラマにもなりました。

その後も、飼育員たちの献身的なケアによって68歳まで年齢を重ねて

きたはな子ですが、近年では、体力の衰えが目立つようになりました。

飼育員たちの献身的な努力で 国内最高齢記録を更新中

そのため井の頭自然文化園では、さまざまな配慮を行っています。現在、はな子の飼育担当チーフを務める宮路良一さんはこう語ります。

「やはり高齢ですから、食事や体調管理など、飼育員全員が神経を使っています。ゾウは繊細な生き物なので、ちよつとした気温の変化、環境の変化によって食欲が落ちてしまうこともあるんです」

現在のゾウ舎は昭和52年に建てられたもので、広さは260平方メートル、室内と室外に分けられています。室外スペースは来園者に姿を見せるための空間で、はな子が夏季に水遊びをするためのプールやシャワーが設置されています。室内スペースは寝室で、冬の寒い時期に備えて暖房設備を完備しています。

「はな子はとても寒がりなので、冬場は朝のあいざつに行くとき機嫌が悪いことが多いですね(笑)。しゃつくりが始まると、彼女が寒いと感じているサインです。夏場なら8時30分には屋外へ出すのですが、寒い季節は室内に少しづつ外気を入れながら、1時間ほどかけて徐々に体を慣らします。夕方、まだ日が高いうちに室内に入れるようにしています。お客さんには申し訳ないのですが、はな子の体調が何より大切ですから」

食事にも細心の注意を払っています。ゾウの歯はもとも4本ですが、はな子は現在では歯が抜け落ち、左下の1本しか残っていません。このため、大好物のバナナは皮をむいた状態で、ニンジンもふかして柔らかくしてから与えています。こうした飼育員の献身的な努力が、はな子の健康を支えているのです。

はな子は、正確な誕生日が不明なため、井の頭自然文化園では元日を誕生日と定め、年が明けるとひとつ歳を重ねることにしています。来年(平成28年)の元日、はな子は69歳の誕生日を迎え、またひとつ日本におけるゾウ最長寿記録を更新することになります。井の頭自然文化園では、3月21日に「お祝い会」を開催します。タイ王国大使館などからのお祝いの言葉の後、来場者にははな子の近況を紹介するとともに、特製ケーキがプレゼントされる予定です。